

巻 頭 言

黒 木 哲 徳

人間発達学部子ども教育学科は2年目を迎えた。

学生数も昨年度に比べて若干増加し、2年生まで揃ったことで学科内も活気が出てきた。教育系ということもあってか、素直で穏やかな性格の学生が多い。学科の性格上、女子学生が多いが、この時期の精神的発達において先んじている女性群が男性群を引っ張って行ってくればお互いが伸びていくということが前勤務の大学で見られたことである。

ところで、この一年間で特筆すべきことは観察実習であったと考える。

きめ細かい事前指導と事中並びに事後指導で、実習終了後の学生達の一段と成長した姿が見られた。観察実習ノートもこれまであまり記録を残す習慣のなかった学生達には大変だっただろうが、記録することを通して、自分のことを振り返るという貴重な体験だったのではないかと考える。そのことが介護体験実習にもつながったと考えている。とりわけ、観察実習では連携幼稚園・小学校の先生方の熱意ある真摯な対応が、学生の成長の大きな要因の一つであった。連携学校園方式による実践力の形成という全国でも稀有な本学科の取り組みが着実に実を結びつつある。

その背景には子どもの学び研究所の地道な活動がある。

連携学校園の先生方との月一回の研究会を通して、連携学校園との連携の姿を模索すると同時に学生の実践的力量形成の方法を地道に追究してきたからである。このことに子ども支援地域活動が加わることで、学生の実践力や見識が一段と深まり、加えて園や学校並びに地域との絆もより堅固になる。これが本学部・学科の持つ大きな特徴として、これからの保育士、幼稚園・小学校教員の養成の新たなモデルの一つになればと期待している。今後、連携学校園の方式をさらに拡大していくことを通して、地域全体の教育の向上や子どもの育ちを核とした地域の再生に貢献できる礎が築けると考えている。

その他、上海師範大学との学術交流もいよいよスタート出来そうである。まずは、学生たちが語学研修を通して視野を広げていってくれることを期待している。さらには、特別支援の課程認定や大学院設置の準備も早急に進めなくてはならない。

また、来年度は教育実習の年であるとともにいよいよ就職へ向けての取り組みを強化しなければならない年でもある。

将来の展望を持ち、変化の早いこの時代に対応できる学部・学科となるよう、今後も一段と力を合わせて前進したい。

年報には、この1年間の様々な活動が記載されており、それをいちいちここで取り上げることはしないが、学部・学科の発展に向けての構成員の協力する姿と個々人の着実な歩みをみることができる。

教育は誰もが口を挟むことができる領域であり、それだけに専門学として確立することの難しさがある。大学に籍をおく者としては、これまでの歴史に学びつつ、それらの研究成果をしっかりと踏まえた上で、保育と教育の専門職のための専門学の確立に向けて努力しなければならない。

この年報がそのための役割をも担ってくれることを期待する。

